文化体験プログラムデザイン：地元職人との協働

Design of Cultural Experience Program: Effective Collaboration with Local Craftsman

松下　恵子
Keiko MATSUSHITA
和歌山大学国際イニシアティブ基幹日本学教育研究センター特任助教

Abstract

The aim of this study was to plan and implement a cultural experience program and to verify its effectiveness and significance. Therefore, a tatami production workshop was conducted with local tatami craftsman. The survey results showed that both the participants and the guest teacher attached importance to learning about culture through communication with others. It was also found that the cultural experience program helped to deepen intercultural understanding, and that intercultural communicative competence became active through the guest teacher.

キーワード/Keywords　日本文化、文化体験、ゲストティーチャー、異文化理解能力、Japanese culture, Cultural experience, Guest teacher, Intercultural competence

1. はじめに

2020 年度より担当する「日本文入門 A・K」は、日本文化について様々な角度から幅広く学び、多様な体験を通して日本文化への興味や関心を高めることを目標としている。松下（2021）の実践報告では、日本文化に対する捉え方を留学生自身の言葉で言語化すること、また他者とのインターアクションを通してどのように日本文化の捉え方が変化したのかを確認した。2021 年度から対面授業が再開となり、書道、茶道、調理実習などの文化体験活動を授業の中で扱うようになった。

日本文化体験学習にかかわる日本語教師への調査（森川 2020）によると、「体験学習

のみでは学習にならない」「専門性のない日本語教師が文化を教えられるのか」といった、授業の質や教師の専門性のなさに不安を覚える声が多い。筆者も同様の思いを抱えており、参加者が「楽しかった」という感想だけで終わらないように、プログラム内容を工夫し、変体仮名を書く書道やハラル和食の調理実習などを行った。

また、他者とのインターアクションを通して日本文化を理解するという観点から、大学の外、つまり地元である和歌山の文化を扱うことや、地域の日本文化担い手と交流する機会が必要だと考え、地元職人によるワークショップを企画した。本稿では、畳職人による「畳制作ワークショップ」と畳制作現場見学の活動について紹介し、学習者へのアンケート調査や畳職人への聞き取り調査によって、ゲストティーチャーによる日本文化体験学習の効果を検証する。

2. 地元リソースを活かした日本文化に関する教育実践

地域文化のリソースを活かした日本文化に関する教育実践は、留学生の日本事情や日本文化に関する授業の中で行われることが多い。今井ほか（2012）による高知大学の体験型日本事情の実践では、日本語教師による体験授業を行っている。留学生による日本語カフェを行うことで地域の人々と交流したり、公共交通機関を使って高知市内へ出かけたり、日本料理作りやお正月体験など、季節の行事を体験する活動を行った。つぎに、尤・黒沢（2018）の山形大学における日本文化体験授業では、日本文化を知識としてではなく、実際に体験することで理解することを目的とし、茶道や座禅、地域の祭りなど社会的リソース（茶室、寺、郷土館）や人的リソース（ボランティアや地域の専門家）を活かして行った。

地域性を活かすという観点から、大学が京都市中心部にあるという立地を活かし、伝統の継承者として活躍する京都の人々をゲストスピーカーとして招き、その立場の人のみが知り、伝えることのできる話を聞き、さらに学外の多種多様な機関を訪問する体験型活動を行う実践（木谷・高岸 2019）や、留学生が三重県に関するテーマ（名所、産物、三重県出身の人物など）について 5 分程度のポスタープレゼンテーションを、三重県外の他大学の学生に対して発表するという活動を通して、地域への理解や愛着度を深める実践（正路 2021）などが行われている。

ゲストティーチャーによる文化体験授業は、小学校や中学校でも積極的に取り入れられており、柳・橋本（2002）は、学校・家庭・地域の三者が連携して子どもを育てるという視点が必要不可欠との考えから、専門的な知識や技能等を持つ地域の人々（ゲストティーチャー）の教育力を小学校の音楽の授業に取り入れ、ゲストティーチャーから本物の音楽の素晴らしさを直接的に感じ取ることで子どもたちの音楽性がより豊

かなものになると考えた。また、小川（2013）は、連携協力校（中学校）でゲストティーチャーによる４つのモデル授業を実施し授業の比較分析を行うことで、事前活動が重要であること、ゲストティーチャーと教師との関係性および教師の授業への関わり方や立ち位置を検討する必要性があるとした。

最後に文化体験プログラム開発や効果測定に関する実践を確認する。森川（2019）は、伝統文化を通して異文化理解プログラムの開発の可能性を検討するため、能楽や茶道の継承者へのインタビュー調査を行い、継承者自身がどのようなことを日本語学習者に伝えたいと考えているのかを確認した。そして、日本語教師向けの文化体験型ワークショップを実施し、継承者から伝わる内容が日本語学習において異文化理解の助けとなることや、伝統文化を学習素材として積極的に取り扱うことの意義を確認した。唐津（2021）は、海外の大学での日本語プログラムにおける効果的な体験活動を検討するために、四種類の日本文化体験活動（茶道体験、おにぎり作り体験、落語寄席、日本文化フェスティバルへの参加）を実施し、体験活動を通して学生たちが日本語や日本学、日本文化にどのように興味を示すのか、また、それらの機会が学習意欲に何らかの影響を与えるのかについてアンケート調査をもとに考察した。日本文化体験活動は、主体的な興味関心を喚起させ、学習の動機付けにつながること、仲間意識が強くなることを報告した。

ここで取り上げた教育実践は、主に地域リソースの活かし方およびプログラムの内容計画に重点が置かれており、「Plan（計画）」「Do（実行）」「Check（評価）」「Action（改善）」の「PDCA サイクル」に基づく教育実践である。しかし、本研究ではプログラム実施および参加者の反応に重点を置き、「Observe（観察）」「Orient（現状判断）」「Decide（決定）」「Act（行動）」の「OODA サイクル」に基づいた教育実践を行う。

3. 授業の実施状況

3.1 「日本文化入門」概要

「日本文化入門」は、前期（4 月-8 月）と後期（10 月-2 月）のそれぞれ、週 1 回、90 分授業で 15 週間行われる。2021 年度より対面授業が再開し、内容によって対面とオンラインを切り替えて行っている。2022 年度の参加者は、前期 15 名（出身は中国、マレーシア、ベトナム、スリランカ、ブラジル、ウクライナ、ミャンマー）、後期 34 名（中国、ベトナム、韓国、フランス、インド、マレーシア、台湾、インドネシア、スリランカ、ブラジル、トルコ、ミャンマー、ウズベキスタン）であった。参加者 49 名のうち 37 名が交換留学生および日本語・日本文化研修留学生であり、12 名が学部生であった。それぞれの授業計画は、表 1 および表 2 の通りである。

日本文化体験は、前期 5 回（書道体験、畳制作ワークショップ、職場見学、茶道体験、調理実習）、後期 3 回（畳制作ワークショップ、茶道体験、和菓子作り体験）の計 8 回実施した。担当講師は、書道体験と調理実習は筆者が担当し、茶道体験、畳制作ワークショップ、和菓子作り体験についてはゲストティーチャー（和歌山大学茶道部員 4 名、畳職人、和菓子職人）に依頼した。

表 1　日本文化入門 A（前期）授業計画

第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	日本美術
第 3 回	書道（1）書道の歴史、書体
第 4 回	書道（2）変体仮名を読む
第 5 回	★書道体験（変体仮名）
第 6 回	古典文学(1)源氏物語
第 7 回	★畳制作ワークショップ（畳職人）
第 8 回	★課外授業（畳の制作現場見学）
第 9 回	古典文学（2）平家物語
第 10 回	茶道(1) 茶道と禅、茶道の基礎知識
第 11 回	★茶道体験（茶道部）
第 12 回	和食（1）和食、ハラル和食レシピ
第 13 回	★調理実習（ハラル和食）
第 14 回	最終プレゼンテーション準備
第 15 回	プレゼンテーション評価活動

表 2　日本文化入門 K（後期）授業計画

第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	伝統芸能（1）伝統芸能の歴史
第 3 回	伝統芸能（2）歌舞伎（勧進帳）
第 4 回	伝統芸能（3）能（道成寺）
第 5 回	服装史（1）日本の服装史
第 6 回	服装史（2）グループ活動
第 7 回	服装史（3）グループ発表
第 8 回	★畳制作ワークショップ（畳職人）
第 9 回	役割語（1）グループ活動
第 10 回	役割語（2）グループ活動
第 11 回	★茶道体験（茶道部）
第 12 回	役割語（3）評価活動
第 13 回	★和菓子作り体験（和菓子職人）
第 14 回	最終プレゼンテーション準備
第 15 回	プレゼンテーション評価活動

3.2　畳に関するワークショップ実施概要

3.2.1　ゲストティーチャー（畳職人）について

ゲストティーチャーは、和歌山市にある山哲畳商店 4 代目の山本祥太氏に依頼した。依頼のきっかけは、筆者自宅の畳交換の見積もりの際に、畳の構造や素材、種類などに関する丁寧で分かりやすい説明を聞き、畳に関する理解が深まったことにある。また、畳文化についてこれまで意識していなかったことを反省し、畳と日本家屋への興味関心が高まった。この内容は留学生にとっても日本文化の捉え方を考える機会になるのではないかと感じ、山本氏にゲストティーチャーを依頼したところ、快く引き受けてくださった。

3.2.2 ワークショップ実施内容計画

ワークショップの内容については、山本氏と複数回の打ち合わせを重ねて検討した。筆者からは留学生が実際に本物を見たり、触ったりすることで、畳文化に興味を持ってもらえるように意識したいと伝え、山本氏からは畳文化や畳の良さを留学生にわかりやすく伝える工夫がしたいとの相談があった。そこで、全体の構成として「畳制作ワークショップ」と「畳制作見学」を実施することとし、ワークショップは畳に関する講義とミニ畳作り体験、畳制作現場見学は畳の機械制作の工程を見学し、3 代目（山本氏の父親）による畳の手縫い技術を実演してもらうことにした。

3.3 活動内容

3.3.1 ミニ畳づくり体験ワークショップ（2022 年 6 月、12 月実施）

畳制作ワークショップ（90 分）は、2022 年 6 月 2 日（1 回）と 12 月 1 日（2 回）の合計 3 回実施した。12 月は履修者が 34 名であったため 2 つのグループに分けて実施した。畳制作ワークショップの大まかな流れは以下のとおりである。

【畳制作ワークショップの流れ】

①畳の歴史

②畳の構造（部位名称）

③畳の種類(材料・素材の産地、素材（井草）の制作過程など)

④実際に畳に触れてみる

・素材の違い（井草、紙、色）

・4 種類の素材を国産・中国産に分類する

・4 種類の素材を値段の高いものから安いものに順番に並べる

⑤畳に関する雑学

・畳縁は踏んではいけないのか？

・畳が減少して来ている要因など。

⑥ミニ畳作り体験

前半はパワーポイント資料を提示しながらの講義形式で、畳の歴史や畳の構造・素材・種類、畳の作り方などについて、動画などを交えながら説明した。その後、実際に畳の表地や畳縁の布地について、サンプルを触りながら素材の違いを確認した。そして、事前に用意しておいた 4 種類の素材について、国産・中国産に分類したり、値段を順番に並べたりした。後半は B5 サイズ程度のミニ畳を作る活動を行った。

ワークショップでは、実際に畳に触れて素材の違いを確認したり、品定めをするという部分が盛り上がった。素材に触れて何を感じたのか、また、なぜその素材の品質が良いと考えるのか／悪いと考えるのかなど、留学生それぞれの考えを積極的に発言し

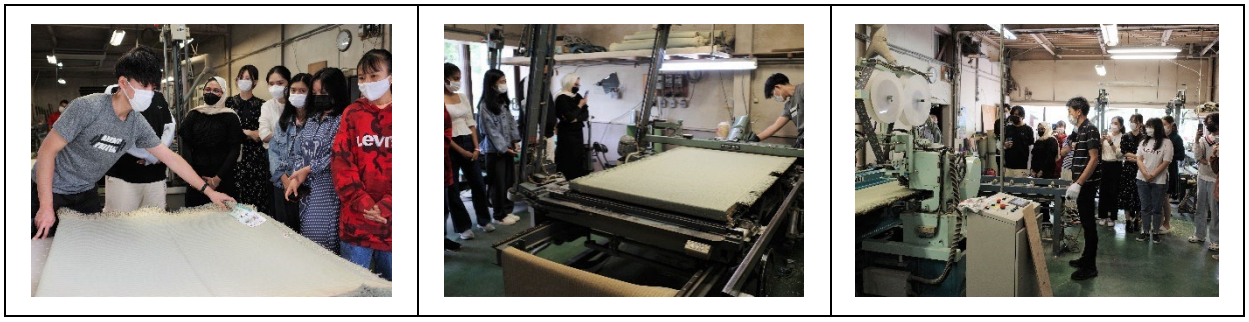
ていた。また、ミニ畳作りでは互いに協力し合いながら畳制作を行っていた。

3.3.2 畳制作現場見学（2022 年 6 月実施）

畳制作現場見学は、2022 年 6 月 10 日に課外授業として行った。山哲畳商店を訪問し、機械での畳制作工程を見学した。また、山本氏の計らいで、実際に素材の重さを確認したり、手縫い技術を見せてもらうなど、普段は見ることのできない活動も取り入れてくださった。留学生の反応は非常によく、積極的な質問（制作工程や技術に関すること、一般家庭での畳の貼り替えサイクルや時期など）が多くあった。

写真 1 畳制作ワークショップの様子

写真 2 畳制作現場見学の様子



4. 研究方法

4.1 参加者に対するアンケート調査

畳制作ワークショップを通して日本文化をどのように捉えたのかを留学生自身の言葉で言語化させること、また、活動を通して他者とのインターアクションがどのように起きたかを確認するために参加者に対して自由記述回答式のアンケート調査を行った。質問項目は以下の 5 項目である。

1. 畳ワークショップの満足度を 5 段階評価で教えてください。
2. 満足度の理由を教えてください。
3. 畳ワークショップで学んだことは何ですか？
4. 畳ワークショップで難しかったことは何ですか？
5. 畳職人の山本先生にメッセージを書いてください。

2022 年 12 月 1 日に実施した畳ワークショップ終了後に参加者 34 名に対して、Microsoft Forms を使用したオンラインアンケートを実施し、30 名から回答を得た。

アンケートの分析は、まず、畳職人とのインターアクションや畳文化の捉え方に関する特徴的な回答例を取り上げ、その傾向を分析する。次に、テキストマイニング法によって自由記述データを定量的に分析する。樋口（2020）が開発した KH Coder（ver.3. Beta.06d）を使用し、「頻出語」「共起ネットワーク」を示すことで回答にどのような語彙を頻繁に使用する傾向があるのかを把握する。「共起ネットワーク」とは、よく一緒に使われている語同士を、線で結んだネットワークのことである（樋口ほか 2022:39）。頻出語や共起ネットワークを分析することで、自由記述形の膨大な言語情報の共通点や相違点を分析することできる。

4.2 ゲストティーチャーへの聞き取り調査

3 度にわたるワークショップ実施や畳制作の見学など、全面的に協力をしてくださった山本氏にとって、この活動がどのような意味を持つのか、また、日本文化の担い手として、どのように日本文化（畳文化）を他者に伝えようとしているのかを確認するため、参加者へのアンケート結果をまとめたものを送付したうえで、2023 年 1 月 6 日に

以下の 4 項目について聞き取り調査を行った。

1. ワークショップ内容について工夫したこと
2. ワークショップを実施してうまくできたところ
3. ワークショップを実施して難しかったところ
4. 全体的な感想

山本氏の回答を分析することで、ゲストティーチャーと協働で作り上げる文化体験プログラムの意義を考察する。

5. 結果と考察

5.1 学習者へのアンケート結果

5.1.1 満足度および自由記述からの抜粋

1）満足度に関する 5 段階評価およびその理由

満足度に関する 5 段階評価は、回答者 30 名のうち、29 名が「5」であり、1 名が「4」と評価し、平均評価指数「4.97」と高かった。理由については、「畳に関する説明が丁寧でわかりやすい」「畳文化について知らなかったことをたくさん学ぶことができた」「畳の感触や匂いがとても好き」「実際に様々な畳を見たり触ったりしていい経験だった」「初めての体験でとてもよかった」「実際に畳を作ることができた」「日本の伝統文化を日本現地で直接体験できるということだけでも十分満足」「みんなで一緒に作るのがよかった」など、講義と畳作り体験というプログラム内容を評価していることがわかった。他にも、以下のように、ゲストティーチャーへの評価に関する記述も多くみられた。

・山本さんから丁寧なご指導をいただいたからです。
・私たち初心者にちょうどいいレベルで説明して頂いて嬉しいです。
・教室の雰囲気は気軽で、畳に関することもはっきり説明してくれました。
・説明の時やさしい言葉を使ったから、全部分かりました。ありがとうございます。

2）畳ワークショップで学んだこと

ワークショップで学んだことについては「歴史」「材質」「種類」「構造」など、講義で扱った内容に関する回答が多かったが、実際に畳に触れてみたり、ミニ畳作りを通して感じたことを記述している回答もあった。

・畳の構造とか、材料とか、品質などのことで、本物に触って感動しました！
・畳の作り方と畳を作るための工夫差です。作った畳はミニだけなので、一般的な畳ならもっと大変だと思っています。
・畳の歴史、材料や材料の産地、畳の良し悪しの見分け方、畳の作り方

・格安畳と高級畳の違いを理解しました。

3）畳ワークショップで難しかったこと

ワークショップで難しかったことについては、回答者 30 名のうち 11 名が「なし」と回答した。多かった回答としては、「畳の見分け方」やミニ畳制作の技術的な内容を挙げていた。

・畳の良し悪しの見分け方がちょっと難しいと思います。

・ホッチキスを使う時、力が必要ですからちょっと難しかったです。

・畳を作る過程は細かい作業だった。

4）畳職人山本氏へのメッセージ

山本氏へのメッセージを分析の対象に取り入れた理由は、留学生がゲストティーチャーに対し、どのように自分の思いを言語化し伝えているかを分析するためである。以下のように、山本氏のワークショップに対する取り組みや畳文化の良さを留学生に伝えたいという情熱が留学生に伝わっていることがわかる。

・初めて聞く内容でしたが、ゆっくり、詳しく、わかりやすい単語で説明していただき、よく理解できました。

・日本文化の一部が体験できて嬉しいです。専門用語は簡単な言葉と写真で説明して頂いたので 99%理解できました。畳についてもっと詳しく勉強したくなりました。

・山本先生は優しくて熱心に教えてもらったので、先生のことが大好きです。畳に向ける感情をいつも持ち続けてね。それなら、私たちだけではなく、若者はこの日本の面白い文化をもっと分かることができると思っています。

・外国人にもっと理解しやすいために話すスピードが適切で優しくて、まだ若いのにこんなに立派だと思います。ちなみに、イケメンです。

・畳作りを通して、このような日本の伝統文化が残っているのは感心します。

・山本先生は家族の伝統を受け継いでいることに感心しています。チャンスがあれば、ぜひお店で畳を体験してみたいと思います。

5.1.2 「頻出語彙リスト」と「共起ネットワーク」

自由回答記述形式である質問 2 から質問 5 までの全回答における頻出語彙を抽出し、その中から上位 20 位程度の語彙を表 3 に示した。

抽出語彙を見ると、「畳」が圧倒的に多く、次に「ありがとう」「作り方」「面白い」「教える」「作る」「説明」「体験」「材料」「無い」「歴史」と続く。「ありがとう」「教える」「先生」といったゲストティーチャーに関連するものが含まれており、また、「作り方」「作る」「分かる」「思う」といった動詞が含まれていることが特徴である。また、「勉強」「知識」などのように、「体験」「作る」といった活動型とは異なる語彙も含ま

れている。

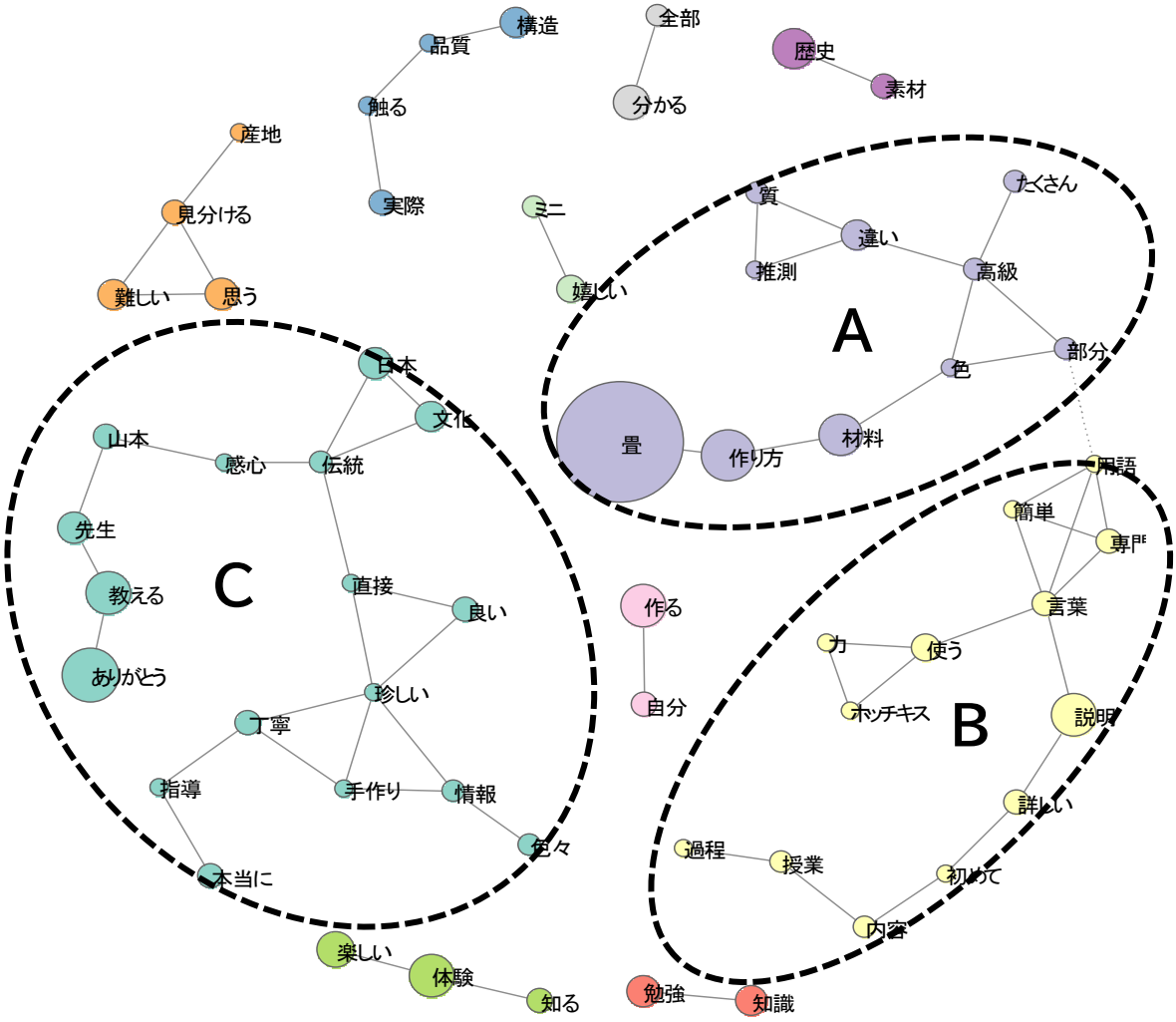
表 3 抽出語リスト（質問 2～5 の回答）

順位	抽出語	出現回数
1	畳	103
2	ありがとう	20
3	作り方	18
4	面白い	15
5	教える	13
5	作る	13
5	説明	13
5	体験	13
9	材料	12
9	無い	12
11	歴史	11

順位	抽出語	出現回数
12	楽しい	9
14	分かる	8
14	思う	7
14	先生	7
14	日本	7
14	勉強	7
18	違い	6
18	構造	6
18	知識	6
18	難しい	6
18	文化	6

つぎに、語彙と語彙との共起関係を観察することで、日本文化／畳文化をどのように捉えて言語化しているのかを共起ネットワーク（図 1）により確認する。グループ A では、「畳」という大きな円を中心として、「作り方」「材料」「色」「違い」「推測」がつながっている。講義や実物に触ることを通して、畳文化について理解したということがわかる。そして、グループ B では、「説明」「使う」「言葉」「専門」「内容」「授業」「過程」のように、ワークショップの活動内容に関連する語彙がつながっている。グループ C の「ありがとう」のつながりを見ると、「教える」「先生」「感心」「伝統」「日本」「文化」「直接」「手作り」「指導」のように、ゲストティーチャーから学ぶことによって、伝統や文化を学ぶことができたと捉えていることがわかる。３つのグループの近くには、「作る」「自分」、「知識」「勉強」、「楽しい」「体験」「知る」があり、授業や体験を通して知識が深まったと捉えていることがわかる。このことから、ゲストティーチャーから学ぶこと、そして実物に触れ、実際に自分の手で作ることを通して畳や伝統、日本文化について理解を深めたといえるだろう。

図 1 共起ネットワーク（質問 2～5 までの全回答）



5.2 ゲストティーチャーへの聞き取り調査結果

学生へのアンケート結果をまとめたものを送付したうえで、2023 年 1 月 6 日に山本氏への聞き取り調査を行った。山本氏の回答を以下に示す。

1）ワークショップ内容について工夫したこと

留学生でも分かるような簡単な言葉に言い換えて、初めて畳を学ぶ学生さんにも理解しやすい順序で説明するように心がけて、内容を工夫しました。

2）ワークショップを実施してうまくできたところ

時間配分・アンケート結果から分かったことですが、専門用語を留学生にも分かるような説明ができたところです。

3）ワークショップを実施して難しかったところ

楽しく学んでいただきたかったのですが、自分がまだまだ未熟で固すぎて学生さんも少し緊張（固い雰囲気）にしてしまいました。そのため、講義の一連での質問に対してのリアクションも少し薄かったのかと思います。その為、学生さんの呑み込み（理解）も不十分になったんじゃないか？とも感じました。

4）全体的な感想

満足のいく授業と評価をしてくださり、本当に留学生の皆さんには感謝しております。まだまだブラッシュアップできる内容もあると思いますし、内容が難しい／多すぎるため、もう少し内容を省略すれば、より覚えてもらいやすい講義になるかと思います。

回答 1 と 2 には、「簡単な言葉に言い換え」「理解しやすい順序」などのように、参加者の理解を重視していることがわかる。事前打ち合わせ時にも、講義スライドの文章や文字表記などについて相談があり、キーワードやルビ表記の修正を重ねていた。また、講義内容の順番に関しても歴史→構造→素材というように、活動内容との関連を考えながら順番を組み立てていた。

回答 3 を見ると、留学生のリアクションや反応を気にしていることがわかる。ワークショップの中で何度か畳に関するクイズや質問を山本氏から投げかけていたが、なかなか答える学生がいないこともあった。そのことを「自分が未熟だったため」、学生を「少し緊張（固い雰囲気）」にさせたと捉えている。山本氏にとってワークショップの中で参加者とのやり取りやコミュニケーションが重要であることがこの回答から明らかとなった。そして、回答 4 では、留学生の反応を見ながら講義の内容を良いものに改善していこうとする姿勢が表れていた。

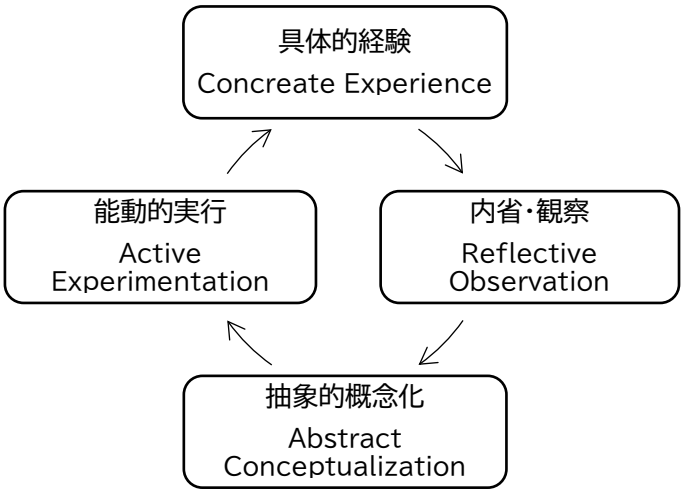
また、「畳ワークショップ」の実施は山本氏にとっても畳職人としてのアイデンティティに大きく影響を与えている。2022 年 11 月 12 日付ニュース和歌山の新聞記事に、楽しいことを聞かれ次のように答えている。「畳は日本で生まれた文化。和歌山大学の留学生に、ミニ畳づくり体験を通して日本文化を伝えています。畳になじみのない人が増えているので、手触りや匂いなど魅力を知ってもらえるよう頑張ります。」

「畳制作ワークショップ」は、講義とミニ畳づくり体験という 2 部構成で企画し、講義で使用するスライド作成、講義で使用するサンプルの準備、参加者全員分のミニ畳制作キットや道具など、準備に膨大な時間と労力がかかるが、日本文化を伝えたいという思い、畳の魅力を知ってもらいたいという気持ちが大きな原動力となり、文化体験プログラムに協力してくださっているのである。

5.3 考察

文化体験プログラムを実施することは日本文化への興味関心や異文化への理解を伸ばすことができる。しかし、ただ体験するだけでは学びを深めることはできない。コルブ（1984）は、4 つの段階を循環することで、学習者が学びを振り返り、学びを深めることができる「経験学習の循環サイクル」を提唱した（図 2)。この考え方では、学びは結果ではなくプロセスとして捉える。つまり、経験したことについて内省を通じて学びを振り返ることで学びをより深めることができると考える。文化体験プログラムを通して多様な参加者（ゲストティーチャーや日本語教師も含む）が感じ方の違いや互いの知識を共有しながら、それぞれが内省をし、次の異なる経験へと転用していくという学習サイクルができるのである。

図 2 コルブの経験学習モデル（Kolb 1984）



コルブの経験学習モデルをもとに本実践における学生の経験学習サイクルを表 4 に示した。学生はワークショップの活動やゲストティーチャーとの交流を通して、畳に関する感じ方や捉え方について考え、抽象的概念を自分なりに理解する。そして、さらに詳しく調べたり、本物に触れようとするなど、次の行動につながるという学習サイクルが考えられる。そして、ゲストティーチャーの経験学習サイクルについても表 5 に示した。ゲストティーチャーは、ワークショップの準備・実施、そして学生との交流を通して、ワークショップの内容について内省をする。そして、学生のリアクションや自身の発言や行動を振り返りながら、ワークショップの目標を明確にし、その目標に向けて内容の改善を図ったり、コミュニケーションを工夫したりするといった行動につながるという学習サイクルが考えられる。

表 4 学生の経験学習サイクル

具体的経験	ワークショップ体験、ゲストティーチャーとの交流
内省・観察	好き、楽しい、考える、知る、推測する、見分ける、難しい、思う
抽象的概念化	伝統、日本文化、歴史、畳文化、品質、高級
能動的実行	畳について詳しく調べる、お店に行って体験する

表 5 ゲストティーチャーの経験学習サイクル

具体的経験	ワークショップ準備・実施、学生との交流
内省・観察	簡単な言葉、理解しやすい順序、学生のリアクション、自分の発言
抽象的概念化	留学生に伝わる畳文化の良さ
能動的実行	ワークショップ内容の改善、コミュニケーションの工夫

また、学生へのアンケート調査やゲストティーチャーの聞き取り調査から、留学生やゲストティーチャーが、畳制作ワークショップの経験を振り返り、経験を通して感じたこと、考えたことを自身の言葉で言語化した。その中で他者とのかかわりが重要であると意識していることが明らかとなった。このことは、異文化間コミュニケーション能力に対する効果も考えられる。

図 3 バイラムの異文化間コミュニケーション能力の構成要素（Byram 2020:62）

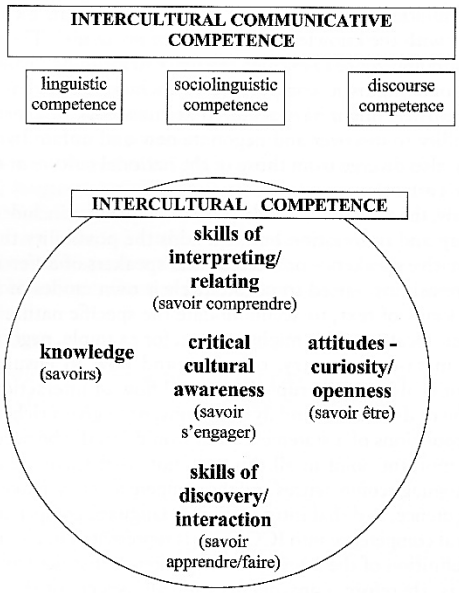


Figure 2.2 Intercultural competence and intercultural communicative competence

バイラム（Byram 1997）による異文化間コミュニケーション能力は、言語能力、社会言語能力、談話能力の言語コミュニケーションに関する能力と、異文化間能力で構成される。バイラムの異文化間能力は 5 つの要素からなる。好奇心や寛容性などの「①態度（attitudes-curiosity/openness）」、自文化や多文化に関する社会文化的な「②知識（knowledge）」、他文化を解釈し、説明し、自文化と結びつける「③解釈・関連づけのスキル（skills of interpreting / rerating）」、新たな知識を得たり、実際のコミュニケーションの中で自分の知識や態度を使う「④発見・相互交流のスキル（skills of discovery / interaction）」、自文化や多文化を批判的にとらえることのできる「⑤批判的な文化意識（critical cultural awareness）」である（図 3 参照）。

本実践における学生アンケートの記述内容について、バイラムの異文化間能力 5 要素を考察すると、表 6 のように示すことができる。

表 6 学生の異文化間能力

態度	面白い、楽しい、満足、うれしい、興味、感心
知識	知識、構造、品質、材料、本物、作り方
解釈・関連付けのスキル	畳と日本文化、伝統
発見・相互交流のスキル	畳作りを通して文化を理解、講師を通して伝統を理解
批判的な文化意識	自国文化との違い、他国との違いなど

学生アンケートの記述内容は、ゲストティーチャーに関する記述が多く、ゲストティーチャーとのコミュニケーションを通して文化を理解していたと言えるだろう。このことは、バイラムの異文化間コミュニケーションの中の「言語コミュニケーション」に関する能力が大きく影響しているといえる。また、ゲストティーチャーの聞き取り調査では、参加者の反応を意識した記述が多く、コミュニケーションを通してどのように文化を他者に伝えるかということを常に意識していた。このことは、文化体験プログラムの実施は異文化間コミュニケーション能力の活性化につながると考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、文化体験プログラムをゲストティーチャーと共に企画・実施し、学生へのアンケート調査やゲストティーチャーへの聞き取り調査によって文化体験プログラムと効果や意義を考察した。

調査結果から、参加者もゲストティーチャーも、他者とのコミュニケーションを通して文化を学ぶことを重要視していることがわかった。そして、文化体験プログラム

を行うことで、異文化理解を深めることができ、また、ゲストティーチャーを通して、異文化間コミュニケーション能力が活発になるということも明らかとなった。

今後の課題としては、異文化理解能力の 5 要素をどのようにスパイラルな形で養成していくかということである。特に、自文化との関連付けや、批判的な文化意識については、文化体験プログラムの中に取り入れていく必要がある。また、参加者側だけでなく、ゲストティーチャーや日本語教師に関する学びについて検証してゆきたい。

参考文献

今井多衣子・池純子・東條美紀・尾中美代子（2012）「高知大学農学部の日本事情科目：体験型日本事情への取り組み」『高知大学留学生教育』第 6 巻, 高知大学国際・地域連携センター国際連携部門高知大学留学生教育編集委員会, 97-113.

小川まゆ（2013）「ゲストティーチャー授業の質を高める授業デザインの開発：社会と子どもたちをつなげる授業を目指して」『教育実践高度化専攻成果報告書抄録集』第 3 巻, 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻, 43-48.

唐津麻理子（2021）「日本文化体験活動は日本語学習者に何をもたらすのか？―実施・参加・アンケート調査から見られる課題―」『甲南大学総合研究所叢書』143 巻, 甲南大学, 97-118.

木谷真紀子・高岸雅子（2019）「留学生の「京都」への貢献 ：交流、連携からの発展」『同志社大学日本語・日本文化研究』第 16 号, 同志社大学日本語・日本文化教育センター, 43-56.

Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

正路真一（2021）「外国人留学生による三重地域文化発信―国際交流センター科目「日本事情 I」における Virtual Exchange の取組み―」『三重大学国際交流センター紀要』第 16 巻, 三重大学国際交流センター, 119-132.

Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Byram, M. (2020). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Revisited, 2nd Ed, Clevedon, UK: Multilingual Matters.

樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－』第 2 版. 京都：ナカニシヤ出版.

樋口耕一・中村康則・周景龍（2022）『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング－フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析－』京都：ナカ

ニシヤ出版.

松下恵子（2021）「異文化理解の視点を取り入れた「日本文化」授業デザイン『和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要』第 2 巻, 和歌山大学黒スカル教育機構, 129-143.

森川結花（2019）「日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化理解プログラム開発の可能性」『甲南大学教育学習支援センター紀要』第 4 号, 甲南大学教育教職センター, 53-64.

森川結花（2020）「日本文化体験学習にかかわる教師の認識」『甲南大学教育学習支援センター紀要』第 5 号, 甲南大学教育教職センター, 37-51.

柳伸明・橋本龍雄（2002）「ゲストティーチャーの授業への参画における子どもの学びの深まり一中学 3 年生の雅楽による総合芸術創造の取り組みを通して一」『学校音楽教育研究』第 6 巻, 日本学校音楽教育実践学会, 105-113.

尤銘煌・黒沢晶子（2008）「地域のリソースを活かした日本文化体験授業」『山形大学留学生教育と研究』第 1 巻, 山形大学国際センター, 65 – 80.

新聞記事

「お仕事図鑑～畳職人 山哲畳商店 山本祥太さん」ニュース和歌山, 2022-11-12, https://www.nwn.jp/education/221112shigoto_tatamishokunin/（参照 2023-01-09）